

Web サイトの一般的構成に関する知識形成の検討

村上 悠

<序論>

今日、WorldWideWeb (WWW) は情報通信手段として普及し、多くの人が利用するに至っている。Web 利用者は情報量が爆発的に増加した WWW で、どのような情報探索方略をとるべきか。この問題に対し田原(2008) は、特定の Web サイトを利用した後に、サイトの構成を図に再生させることでページ内容やリンク関係の定着度を評価した結果から、サイト構造を探索の中で学習した方が、その後の探索に対して有効であると示唆した。彼女の研究において、サイト構成の再生時に、興味深いエラーが見受けられた。それは、サイト利用時には目にしていないはずのページを、サイトの構成図に書き込んでしまうエラーである。これは、日常の Web 利用の際に、多くのサイトを閲覧する中でなんらかの形の記憶をしており、それを実験時に見たことと混同したためと考えられる。

<研究目的>

そこで、本研究では、ユーザーが日常的な Web ページ利用の中で多く見受けられる傾向を記憶し、それらの傾向をあわせもつ一般的なサイト構成を頭の中に形成しているという仮説を立て、その妥当性を調べた。また、これに関連して現状の Web サイトのアクセシビリティについても調べた。

<実験方法>

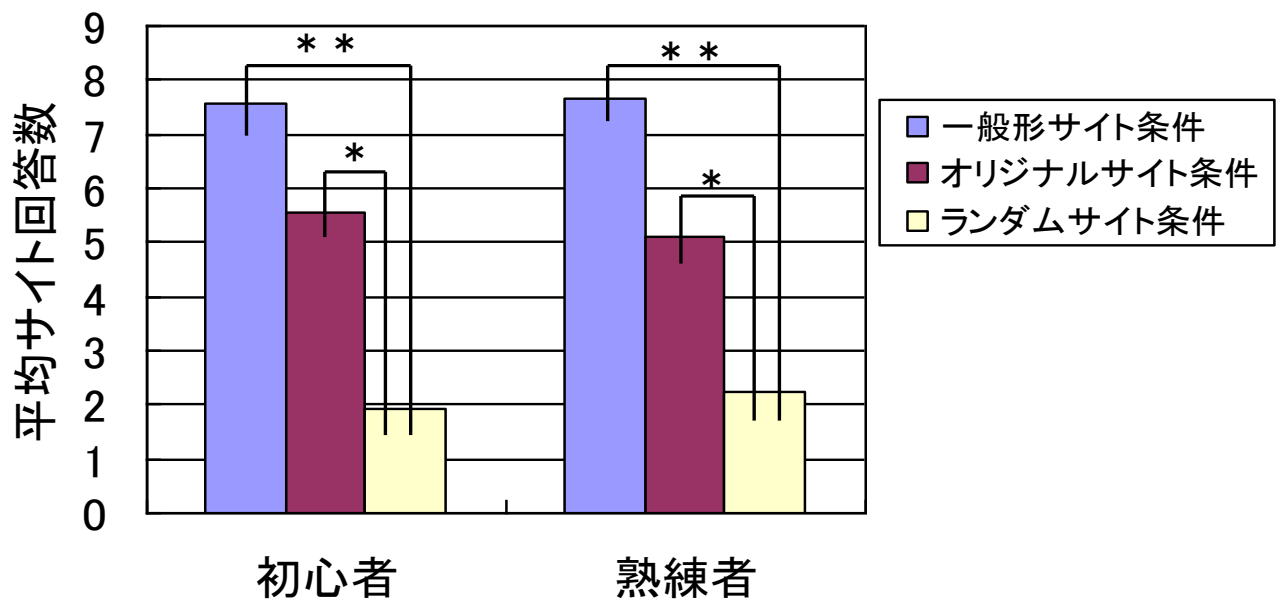
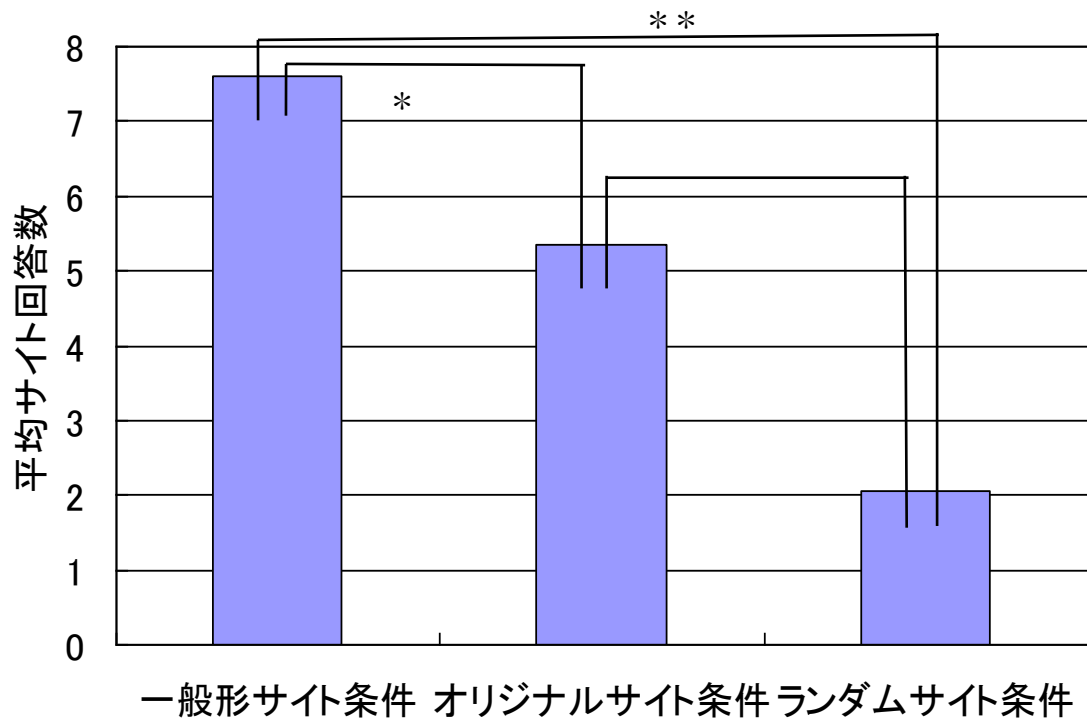
前者については、ユーザーの頭の中に形成される一般的なサイト構成の候補を作成するため大学サイトにジャンルを絞り、代表的な 15 の大学サイトから共通の傾向を抽出し、一般的なサイト構成のモデルとした。実験の際は大学サイトのトップページ(オリジナルサイト)とそれを元に一般型サイトモデルの構成要素を基準にして変更したページ(一般形サイト)、そして比較のためサイトの構成要素に規則性がないページ(ランダムサイト)を用意し、どれがオリジナルサイトかを問うというオリジナルサイト発見課題を行った。

後者については、一般型サイトモデルのトップページの大学案内および研究・教育セッションについて、そのリンク先にあるページから抽出した一般的構成要素とそれとは異なるダミーの構成要素を混ぜ、それらを実験協力者に提示し、本来あるべきと思う構成要素を取捨選択し、配列してもらうサイト構成作成課題を行った。

<結果と考察>

オリジナルサイト発見課題の結果、実験協力者が一般型サイトをオリジナルとして選択

した確率がオリジナルサイトやランダムサイトを選択した確率よりも有意に大きかった。また、実験協力者を初心者と熟練者に分けると、熟練者は一般形サイトを回答しやすい、という傾向が見られた。以上の結果より、仮説が妥当であることが示唆される。



サイト構成作成課題の結果、実験協力者が作成した配列は一般化されたサイト構成にかなり近いものであったことが確認された。しかし、一部異なるものも存在し、ここから、上記仮説の妥当性ととも、現状の Web サイトには改善の余地が残されていることが示唆された。

(指導教員 森田ひろみ)